

公益財団法人 河川財団 河川基金だより

RIVER FUND

Nov. 2025

50



河川
基金

川を愛する人のために

特集1

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門

国土交通大臣賞 受賞者インタビュー

■ 受賞研究

流水型ダム貯水池における堆砂量とその質に関する考察

京都大学防災研究所 非常勤研究員 中村亮太さん

特集2

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門

環境大臣賞 受賞者インタビュー

■ 受賞研究

ダム堆砂を用いた河口干潟における覆砂の効果持続性に関する調査

福岡工業大学 教授 田井明さん

河川環境教育を通じた 将来の 河川環境・河川防災の担い手づくり

bioa (びおあ)

大阪府茨木市

環境問題の改善を図るために、自然環境の保全・再生・創出を目的として、幼児期から社会人に至るまで段階的・継続的な環境教育を実践しています。これまでも150以上の教育機関などで、「ビोटープとは」「SDGs」「生物多様性」「水環境」「河川防災」の授業をしています。また、教員や学生向けの講演会、環境教育啓発のためのシンポジウムを開催し、里地の方々とは河川や田んぼでの体験活動を行っています。今後は活動域を広げ、地域や行政、企業、大学などと協働して、水辺の環境・河川

防災教育とまちづくりがつながる活動をするとともに、環境教育を行うためのカリキュラムの作成、実行する体制や人材の育成を行っていきます。



水辺の観察



田植えを兼ねた泥水体験

河川基金は、『bioa』を応援しています。

河川基金へのご寄付は
全国の川をより良くする活動へと
つながっています。



河川
基金

INDEX

04

特集 1

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門

国土交通大臣賞 受賞者インタビュー

■受賞研究

流水型ダム貯水池における
堆砂量とその質に関する考察



京都大学防災研究所
非常勤研究員
中村亮太さん

08

特集 2

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門

環境大臣賞 受賞者インタビュー

■受賞研究

ダム堆砂を用いた河口干潟における
覆砂の効果持続性に関する調査



福岡工業大学 教授
田井明さん

12

TOPICS

2026 年度「河川基金」助成の募集を開始

- 13 2026年度より「河川基金」助成が変わります(助成一覧)
- 14 河川基金助成 募集要項の主な変更点
- 15 活動成果の発表会及び優秀成果表彰
- 16 2026年度 河川財団賞及び河川財団奨励賞の募集を開始
- 17 2026年度 河川美化・緑化助成事業の募集を開始します

18

INTERVIEW

河川基金助成の現場から



18

インタビュー① 川づくり団体部門 淡海を守る釣り人の会（滋賀県）

仲間たちとみんなで楽しく水辺の清掃
自然体の活動に集まる社会の支持



21

インタビュー② 学校部門 岡崎市立常磐東小学校（愛知県）

学びや遊びを通じ、
ふるさとの人や物を愛する子どもを育む



24

インタビュー③ 研究者・研究機関部門 富山県立大学 准教授 久加朋子さん（富山県）

河床材料の粒度構成変化が河道内樹林化・
流路変動特性に与える影響の実験的検討

27

ご寄付ありがとうございました/
河川財団奨励賞の受賞者表彰を行いました

表紙写真



西之谷ダム
(国土交通大臣賞受賞研究
京都大学防災研究所 中村亮太さん提供)

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門 国土交通大臣賞 受賞者インタビュー

■受賞研究

流水型ダム貯水池における堆砂量とその質に関する考察

三重県・加茂川水系にある流水型ダム「松尾ダム」

8月22日、当財団主催「令和7年度 河川基金研究成果発表会」において、京都大学防災研究所非常勤研究員 中村亮太さんに国土交通大臣賞が授与されました。対象研究「流水型ダム貯水池における堆砂量とその質に関する考察」は、河川基金助成事業 研究者・研究機関部門 若手研究者助成からの採択（2024年度）。中村さんは歴代最年少での受賞となりました。日本の研究環境、特に若手研究者への支援体制の脆弱さが分野を限らず危惧されている中、河川基金の若手研究者助成と、その採択者と研究が高く評価されたことの意義は決して小さくありません。受賞者の中村さんに受賞研究に至る過程と、同じ若い研究者へのメッセージをお聞きました。



PROFILE

京都大学防災研究所
非常勤研究員
中村亮太さん

2018年 鹿児島工業高等専門学校 都市環境デザイン工学科 卒業
2020年 九州大学 工学部地球環境工学科 建設都市工学コース 卒業
2022年 九州大学 大学院工学府 都市環境システム工学専攻 修士課程 修了
2025年 京都大学 大学院 工学研究科 都市社会工学専攻 博士後期課程 修了
博士（工学）

2023年 日本学術振興会特別研究員 DC-2
2025年から現職

鹿児島県始良市出身、京都府宇治市在住。専門は河川工学、応用生態工学。学部卒業研究では、近年実施されたダムの異常洪水時防災操作の実態把握を目的とした研究を行う。大学院より流水型ダムを研究対象としている。日本各地の流水型ダムを対象としたフィールド調査のほか、数値シミュレーションなどを行うことにより、流水型ダムが流砂の連続性や河川生態系（特に底生無脊椎動物）に与える影響の実態解明を試みている。

非常勤研究員としては、深層学習を用いた貯水池における観測データの分析自動化・効率化、排砂路の摩耗抑制技術開発のための水理模型実験に取り組む。

島根県・益田川水系 益田川ダム



高専から大学編入 インターン経験も きっかけに

——はじめに、研究者を志したきっかけを教えてください。

河川やダムを研究していますが、どちらかというと環境寄りのテーマが私の専門と言えるかと思います。もともと川の生き物が好きで、年中、

魚や昆虫の図鑑を眺めているような子どもでした。漠然と水産学部を目指そうと思った時期もあったのですが、なにか趣味と仕事は違うだろうという気がしたのと、親族に土木関係の仕事に就いている者が多かったというのもあり、土木の道に進むことにしました。せっかくなら早く学びたいと思い、鹿児島工業高等専門学校都市環境デザイン工学科に進学しました。

やがて大学編入を考えるようになり、編入先を探す中で、九州大学の島谷幸宏先生を知りました。土木分野にいた

がらも、川や生き物の研究ができるのだと知り、島谷先生の研究室で学びたいとの思いで、九大に編入学しました。九大では、今年度の「河川基金研究成果発表会」で環境大臣賞を受賞された福岡工業大学の田井明先生にもお世話になりました。田井先生も高専から九大に編入されるという、私と同じようなキャリアをお持ちということもあり、とても気にかけていただいております。

ダムに興味を持ったのは、高専5年のときに参加した建設コンサルでのインターンがきっかけです。はじめは河川や環境部門を希望していたのですが、とても人気だったようので、受け入れてくださったのがダム部門でした。そちらでのインターンがとても楽しく、ダムにも興味を持つようになりました。いま河川の中でもダムを中心に研究しているのは、この時の経験からきていると思います。また、福岡の九州支社でのインターンだったこともあり、修士課程ではそちらでアルバイトもさせていただきました。

学部4年で島谷研究室に配属され、修士課程までの3年間を過ごし、流水型ダムを中心に研究しました。修士課程の途中で島谷先生が退官されたこともあり、博士後期課程からは京都大学に移り、角哲也先生のもとで流水型ダムの研究を続けました。学生として2つの研究室に所属していましたが、どちらもフィールドワークを重視する研究室です。島谷先生や角先生のほかに、九大の林博徳先生、京大の竹門康弘先生や小林草平先生には、何度も現場に連れて行っていただき、川やダムの見方、水生昆虫の面白さを教えていた

できました。

非常勤研究員として勤務し始めたのが今年の4月です。研究者としてのキャリアはまだ半年程度ですが、これまでを振り返ってみると、研究者を強く志していたというよりも、興味を持った対象を追求していった結果そうなったという感じです。もちろん、恵まれた環境があつてこそだと思います。先生方には大変熱心にご指導いただきましたし、JST SPRINGなどの博士学生支援も増えてきた時期で、とても運がよかったのだと思います。河川基金の若手研究者助成に採択いただいたことも、大きな追い風になっています。

歴史と美しい景観を持つ 流水型ダムの 個性に惹かれて

——どうして流水型ダムに興味をもたれたのでしょうか。また、どのように今回の受賞研究につながったのでしょうか。

流水型ダムに興味を持ったきっかけは、角先生らによって執筆された『流水型ダムー防災と環境の調和に

島根県・益田川水系 大峠ダム



向けて』(技報堂出版)という本の存在です。九大にいた学部3年生の時、天神(福岡市)の書店で立ち読みをしているときに見つけました。本の表紙にある益田川ダム(島根県 益田川水系)の写真に強く惹かれるものがあり、「これは買って読まないといけない!」と思った記憶があります。この本は、流水型ダムに関する研究成果や事例報告をまとめたもので、当時、学部生の私にとっては難しい内容でしたが、時間をかけてじっくりと読みま

した。地元鹿兒島県にある西之谷ダム(本誌表紙写真)に関する記載もあり、帰省の際に訪れたことで流水型ダムへの興味がより一層深まりました。

全国のいろいろな流水型ダムを見ていくと、当然ですが、ひとつとして同じものはありません。それぞれの流水型ダムやその貯水池が持つ「個性」を、何かしらうまくかたちで説明できないだろうか、というのが今回の研究の出発点です。貯水池の景観に注目すると、ダムによって明確

な違いが見られます。例えば、西之谷ダムの貯水池は氾濫原湿地的な景観をしている一方で、嵯峨谷ダム(島根県)の貯水池は流れの激しい山地河川の景観です。こうした景観の違いには、堆砂特性の違いが大きく影響しています。具体的には、堆砂量が比較的多く、その大部分が細粒土砂である貯水池では、西之谷ダムのような穏やかな景観になります。反対に、堆砂がほとんどなく、細粒土砂もほとんど堆積しないような貯水池では、嵯

峨谷ダムのように激しい景観になります。そこで、流水型ダム貯水池における堆砂量とその質に注目し、それを決めている要因について研究することにしました。

研究内容はとても単純で、「相対水みち幅」という指標によって流水型ダム貯水池における堆砂量と細粒土砂の堆積状況がどのように異なるのかを調べるといえるものです。相対水みち幅は、貯水池底部の幅に対する貯水池内の水みち幅の比をとったものです。この値が小さいほど、堆砂量が多く、細粒土砂がよく堆積するようになる傾向があることがわかりました。さらに、河床部の洪水吐き規模が小さいほど、水みち幅が小さくなるという関係も示すことができました。つまり、「貯水池底部の幅が広いほど、そして河床部の洪水吐き規模が小さいほど、堆砂しやすい」ということになります。こうした関係自体は、感覚的には当たり前のように思えますが、それを定量的に示すことができた点に、本研究の価値があると思います。

また、堆砂データをできるだけ網羅的に集めようとしたところ、日本にどれだけの流水型ダムがあるのか、あるいはどのダムが流水型ダムに当

たるのかについて、正確な情報が見当たりませんでした。そこでまずその点を調べることから始めました。流水型ダムのリストを作るために、流水型ダムと見なすための条件を設定し、日本にある約3千基のダムの中から、その条件に当てはまるものをスクリーニングしました。その結果、運用中の流水型ダムが24基、さらに計画または建設中のものが7基あることがわかりました。実際の流水型ダムを対象とした研究は、依然として少ないのが現状だと思っています。今後、この24基を対象に、それぞれの研究者がそれぞれの視点から研究を進めてほしいと思います。流水型ダムに対する理解が、今後より一層深まっていくことを期待しています。

——運用中の流水型ダムとして、24基のダムを確認されています。その中で、中村さんの「推しダム」はどこでしょうか。

おそらく日本で最も有名な流水型ダムは、島根県の益田川ダムでしょう。私が推しているのは、その上流にある大峠ダムです。1959年に竣工した、堤高23・3mの、古

く、小規模なダムです。苔むした堤体からは長い歴史が感じられ、ひっそりと自然の中に佇む姿が大変美しいと思います。三重県に加茂川水系にある松尾ダムもとても印象的です。1963年竣工、堤高17mと、こちらにも古い小規模ダムです。この天端は県道になっていて、日常的に利用されています。普通に通過するだけだとダムの上を通っているとは気付かないでしょう。

川辺川ダムや足羽川ダムのように、最近の流水型ダムは大規模化、複雑化する傾向にあります。河川の規模や気候変動による洪水外力の増大を考えると自然なことだと思います。一方で初期の流水型ダムは、大峠ダムや松尾ダムのように小さいものが多く、構造的にもシンプルです。そうであるが故に、地域の景観や日常に馴染みつつ、長きにわたり洪水調節という機能を果たしてきたのだと思います。こうした点に、先人たちが治水策として流水型ダムを選択したことの意義を感じます。日本の流水型ダムの原点ともいえるこれらのダムに注目が集まれば、流水型ダムを研究する者として大変嬉しく思います。

助成を若手研究者の 自信や業績に

——現在在籍されている京都大学防災研究所では研究員としてのどのような研究をされているのでしょうか。

普段は、小柴孝太（こしば たかひろ）先生にご指導いただきながら、深淺測量機器や探査機器から得た観測データを自動判別・自動処理するための深層学習技術の開発や、排砂路の摩耗抑制技術の開発に向けた水理模型実験に取り組んでいます。ほとんどが初めての経験ですが、少しずつ慣れてきました。深層学習のモデル作成など、大学院生のころはプログラムを書くことに苦手意識がありました。が、理解できることも増えてきて、最近ではとても楽しく感じています。もともと川の流れを眺めるのが好きなのですが、水理模型のの流れやPIV計測のトレーサーを見てみると、それに少し似たものを感じます。休日や空いた時間を使つて、流水型ダムの研究も続けています。研究者としてのスキルを少しずつ増やし、それを自分の研究にも生かしていきたいと思っています。

——河川基金の若手研究者助成について、「これから助成に応募しようとする若手研究者の方へのアドバイス」という観点からお聞かせいただけますか。

河川基金助成事業に採択されると、現行の助成期間である1～2年の間に、研究をある程度の形にまとめる必要があります。また、助成期間が終了すると、20ページ弱の報告書を作成することが求められます。この報告書を書いておくと、投稿論文の執筆も比較的自由に進められるのではないかと思います。

若手研究者にとつては、河川基金の若手研究者助成に採択されることで、着実に研究実績を積み重ねることができると思います。

特に大学院生にとつては、研究助成への応募はハードルが高いと感じる方もおられると思います。しかし、河川財団では若手研究者の支援に力を入れてお

られ、若手研究者助成の採択数は年々増加しているようです。それに、優秀成果として表彰される若手研究者も少なくありません。「河川基金研究成果発表会」では、同年代の若手研究者がそれぞれの興味や関心に基づき、創意工夫あふれる研究成果を発表しており、大変刺激になります。私自身も皆さんの熱量に負けないように頑張りたいと思います。



益田川ダムの調査に赴く中村さん（左から3人目）

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門 環境大臣賞 受賞者インタビュー

■受賞研究

ダム堆砂を用いた河口干潟における覆砂の効果持続性に関する調査



熊本県・緑川河口干潟で、アサリなど生物への覆砂の影響を調査

河川基金助成事業 研究者・研究機関部門では、今年度から、環境省のご支援のもと「環境大臣賞」が創設されました。8月22日に開催された河川基金研究成果発表会において、「ダム堆砂を用いた河口干潟における覆砂の効果持続性に関する調査」が環境大臣賞を受賞しました。環境水理学をご専門とし河川流域の水環境や河川工学分野の研究に取り組まれている、受賞者の福岡工業大学 田井明教授に、受賞研究にまつわるエピソード、研究に対する思いをうかがいました。



PROFILE

福岡工業大学
社会環境学部 社会環境学科
教授

田井明さん

2010年 九州大学 大学院工学府 博士課程修了
2008年 - 2010年 日本学術振興会 特別研究員
2010年 九州大学 大学院工学研究院 特任助教
2012年 九州大学 高等研究院 助教
2015年 Bangor 大学 訪問研究員
2016年 九州大学 大学院工学研究院 准教授
2023年 福岡工業大学 社会環境学部 准教授
2025年 福岡工業大学 社会環境学部 教授

香川県生まれ。水災害の現地調査や数値シミュレーションを通じて洪水被害の拡大メカニズムや気候変動の影響を解明し、有効な防災策の検討に取り組む。また、水質悪化や水産資源の減少が課題となっている沿岸海洋を対象に、潮汐・潮流・波浪などの流れの変化やそれらが土砂輸送や水質、生物生息環境に与える影響を、最新の観測機器や数値シミュレーションを用いて調査している。

干潟に入り調査をする田井教授（左）



自然を相手に 研究することの おもしろさ

—— 田井先生が研究者を志したきっかけはなんでしょうか。

実際に研究者を目指したのは大学で研究室に入ってからになります。それまでも海や川の環境や災害などについての興味があって研究室を選んだのですが、興味自体は中学生、もしかすると小学生くらいからあったかもしれません。ただ、研究者になろうと決めたのは、研究室に入り、研究の面白さに目覚めてからです。潮流で土砂が動かされたり、地形が変わったりすることに興味があ

り、以来、海や川の環境に関する研究をいろいろな場所で続けています。もともとの専門は土木工学でしたが、将来は国土交通省とか公務員にとも思いましたが、研究自体への興味と、教育という面でも大学に残り、そこから世の中に貢献していきたいと思いました。

大学の卒業論文のテーマは九州の有明海の環境保全についてでした。有明海は閉鎖性内湾ですが、潮流を活かしてその海水をいかに外海水と交換するか、それを促進する技術を、コンピューター・シミュレーションを使って検討するというものでした。有明海は潮汐がすごく大きくて、不思議な現象がいろいろあります。そうした複雑な現象をもっと突き詰めたいと思いました。潮汐自体

が世界的にどう変わっているのかとか、話題によく上る諫早湾の潮受け堤防でどのように流れが変わったのか、どのように環境が変わったのかという研究をしていました。そ

れらの研究自体はいまでも続けていますが、急激な気候変動などで環境が悪くなり、実際に目の前に困っている人——今回の場合は漁業者の方たち——がいるという中で、環境保全に資することをしたいという思いがあり、それが今回の研究にも繋がっていると思います。

—— 先生にとって研究することの魅力とはなんでしょうか。

私は海や川の環境を対象にしている、研究に際して、シミュレーションと現地観測の両方を行い、データを解析したりもするのですが、シミュレーションだけですべてがわかるものでもないし、現地観測だけですべてがわかるわけでもありません。そこが、自然を相手に研究をしていることのおもしろさです。シミュレーション上で工夫しても再現できない現象が現地で起こっていることが、現地のデータから見えたりします。ただし現地からのデータというものは、その時その時点のデータです。自然は毎時毎刻変わるものなので、そこから真実を調べるには、やはりシミュレーションも必要になります。お互いの方法のいいところをバランスよく取

り入れながら、新たな発見をするというのはとてもおもしろいし大変な面もあります。高精度なシミュレーション結果や質の良い現地データを取得するのは、大変ではありますけれども、現象を解明した時はとても嬉しいです。

ダム堆積土を 利用した「覆砂」で 河口干潟のアサリが復活

—— 今回、環境大臣賞を受賞した研究はどのようなものですか。

河川の河口部にある干潟には今、ダムや堰などの構造物の影響で細粒分（ごく細かい土）が多く流れ込んで泥質化が進み、アサリなどの生物の生息場が失われてきています。悪化した底面を良質な砂で覆う「覆砂」という改善策がありますが、その効果についての科学的知見はまだ十分ではありません。一方でダムの底には上流からの土砂が、近年の豪雨の影響もあり、想定よりも早く堆積が進み、将来の貯水容量の低下などのリスクを招いています。私たちの研究は、このダム底に堆積した土砂を材

広大な干潟の調査ではドローンも活用する



料として干潟を覆砂することで、干潟の環境改善ができないかを検証するものです。

熊本県を流れ有明海に注ぐ「緑川」という一級河川があります。上流に緑川ダムがあります。河口域には干潟があつて県内有数のアサリの生産地でしたが、近年は堆積した泥土（ヘドロ）で底質が悪化し、海域の環境が悪くなっています。緑川ダムでは気候変動による大雨の影響などで湖内への土砂の堆積が急増していますの

で、この土砂を底質材料として緑川河口干潟に運搬して覆砂を行い、経過を検証しました。

研究は干潟の生物や物質循環が専門の熊本県立大学の小森田智大先生、熊本大学の山田勝雅先生と共同で実施しています。先のとおり私もほとんどの専門は土木なので、水の流れとか潮汐とかの研究のスキルや知識は活かせるのですが、実際に環境を再生する、守るといふときには物質循環や生物に関する知見が足りないと感じ、長年、共同で研究をしている大変心強い方々です。

覆砂をして3〜4か月後にはアサリの数は増え、個体のサイズも従来の2倍ほどに著しく伸長していることがわかりました。覆砂をすれば住む環境がよくなるので、ある程度アサリが回復するだろうとは思っていたので、数の増え方はまあまあかなとは思いました。ただ、アサリが思ったよりも大きく成長したことには驚きました。そのメカニズムに関しては引き続き検証していく必要があると思っています。

—— 実地での研究、実験では地域の方々の理解が不可欠です。今回の場合は主に地元の漁業関係者の理解ということになりますが、漁業者の皆さんとの調整はどうされたのでしょうか。

地元の川口漁協、緑川漁協の皆さんと協議を重ねました。ダムから砂を持つてきて、なにか変わったことをするにあたっては、やはり何度か説明をしないと、なかなか理解していただけません。ただ、私も共同研究者の先生方も、10年ほどずっとその場所の研究を続けてきたということもあり信頼関係があつたのだらうと思います。実施に関しては比較的すんなりと話が進んだ印象です。

緑川河口干潟では冬季はノリの養殖も盛んなので、本当は秋口に覆砂しようという計画だったのですが、養殖のシーズンを考慮して3月下旬に実施しました。調整しながら、なんとか覆砂させていただくことができました。

—— アサリが大きく育つたということは、漁業者からするとよい話だと思うのですが、皆さんの反応はいかがでしたか。

どうでしょう。「結構、大きくなつたね」という感じで、喜んでいただいているとは思いますが。ただし、今は試験的に実施した段階なので、これをどうしていこうかというのは今後の考え方だと思います。実際、ダムから砂を持つて来ること自体が、お金も時間も労力もかなりかかることなので、これを大きく展開していく方向はありなのですが、続けていくものなのかという問題は残ります。ダム堆砂を利用して覆砂すると、かなり効果があがることは今回わかったのですが、それをどのような方法で進めるか。今、ダム堆砂をもっと川の上流に置いて、実際の川の力を使つて流して、干潟に本来の砂が行くようにするという方法も考えているところですが。今は河口干潟に焦点をあてていますが、内水面の漁協の皆さんとも協議して、川自体の環境もよくするぐらいの規模でやりたいと思っています。

範囲にもよりますが、目標としては1年間、基礎調査をして、砂を置いて2、3年間調査して、なにか差が出るという感じですね。効果があつても、実証するには何年もの調査が必要です。4、5年でとりあえずの結果が出てくれればいいかな

と思っています。ただし本来の緑川の姿に戻すには何十年もかかるので、パイロット事業的にやったあとは現場でまわしていけるようになればいいなと考えています。

研究がどう社会につながる役に立つかを意識する

—— 全国で総合土砂管理がされています。関係者との連携・協力はどのようにされているのでしょうか。

このプロジェクトは、熊本県をはじめ河川やダムの管理者、川や海を利用されている漁業者の方々のご理解・ご協力がなければ実行することはできませんでした。今お話した置き砂の件に関しても、ダム管理者や漁協さんのほうから、ダムの砂を川に置いて欲しいという相談をいただいたのがきっかけです。ダムの砂を河口干潟に覆砂するという話を進める時に、やはり内水面の漁協にも話をしておかないといけないということで先方にかがうと、「川全体の環境の保全も必要なのに、河口ばかりやらないでよ」とのご意見もいただいたので、熊本県の担当者にも協力していただき、この事業が始まる2年ぐらい前

から、共同研究の先生とて、川の研究も少しずつ進めていたのです。その研究発表を事業の説明も兼ねて行いつつ話し合いをする場が、年2回ほど持たれました。それまでには干潟の成果が内水面の漁協の皆さんにも伝わっているの、話が進みやすいのではないかと思います。うまくいけば海の漁業者だけではなくて、川の漁業者も、みんなの利益になります。

これまで、ダムや堰などの河川横断構造物が河川環境に何らかの影響を与えてきたと考えられています。さらに、近年の気候変動、環境のほうを考えると、これからますます大雨が増えて河川の環境が変化していくことが予想されます。今回のプロジェクトで実施できたように流域の関係者が協力して対策を検討していくことが重要ではないかと思っています。だから、地域の皆さんとはよくお話をしています。これからみんなで協力して、みんながよくしていきましよう。研究成果をそのために皆さんに提供して、前に進めていきたいなと思っています。

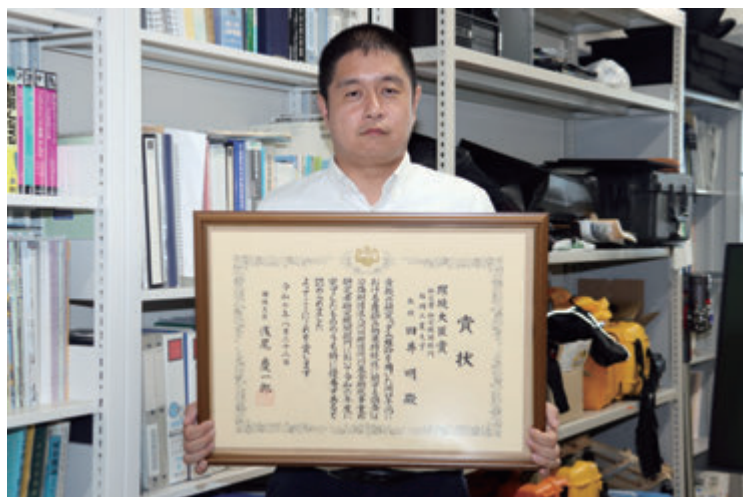
—— 今回の事業に限らず、研究を進める上で、どういったことを大事にされていますか。

私自身の専門が土木工学の中の水理学という分野なので、先に申し上げたように、潮汐がどう変わるのかといったすごく基礎的なところが、研究者としてはいちばん興味があるところですね。しかしそれが社会にどうつながって、どう役に立つのかということは常に意識しています。研究のための研究で終わらないようにしたいと思っています。今回の研究に関しては、行政、地元の漁協の方、私の研究室の学生、いろいろな皆さんの協力のもとに成り立っています。その信頼を裏切らないようにしたい。みんな一生懸命やっているので、私もきちんと結果を出すようにしたいと思っています。

—— 今日貴重な時間をありがとうございました。あらためて環境大臣賞を受賞された感想をいただけますでしょうか。

新設の賞の、その第1回目の受賞ということで、大変光栄に感じています。ただ、目的を達成した研究というわけではまだまだなく、

今始めたばかり、第一步を踏み出したばかりの研究に、このような賞をいただいたというのは、やはりもっと頑張る成果につながるべきだと思います。私たちへの叱咤激励だと思っています。これから実際に緑川の環境を改善し、その成果がほかの地域にも広がっていくように、研究をつなげていき、発展させていきたいと思っています。



福岡工業大学の研究室で。環境大臣賞の賞状を持つ田井教授

2026年度「河川基金」助成の募集を開始

募集
期間

2025年(令和7年)

10月1日(水)～11月14日(金)
18時まで申請
方法インターネットによるオンラインで申請してください。
※詳細につきましては河川財団ホームページにてお知らせいたします。www.kasen.or.jp

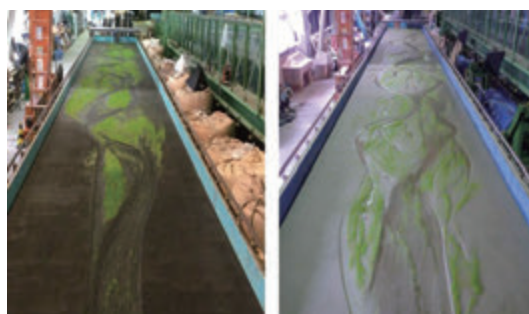
河川基金

検索

河川基金助成の3つの部門

1. 研究者・研究機関部門

理科系のみならず文科系や文理融合の
新しい時代を切り開く萌芽的な研究を
支援しています。



【写真提供】富山県立大学 准教授 久加朋子さま

2025年度:124件(約11,600万円)

2. 川づくり団体部門

川をフィールドにした
人と川をつなぐ活動を行う
市民団体を支援しています。



【写真提供】一般社団法人環境文化研究所

2025年度:81件(約7,540万円)

※新規採択のみ(新設川づくり団体の継続は含みません)

3. 学校部門

学校教育の現場において
河川・流域を通じて
防災や環境等を学習する
河川・水教育を支援しています。



【写真提供】岡崎市立梅園小学校

2025年度:169件(約3,270万円)

2026年度より「河川基金」助成が変わります

助成一覧(2026年度助成より)

助成部門	助成対象者	助成区分	期間	助成金額
研究者・研究機関	研究機関	一般的助成	1年	200万円まで (金額査定あり)
			2年	300万円まで (金額査定あり)
		緊急災害調査	1年	300万円まで (金額査定あり)
		学術図書出版助成	1年	100万円まで (金額査定あり)
		アウトリーチ活動A	1～2年	200万円まで (金額査定あり)
	一般研究者	一般的助成 (60歳未満の研究者)	1年	100万円まで
			2年	150万円まで
		学術図書出版助成	1年	100万円まで (金額査定あり)
		アウトリーチ活動B	1～2年	100万円まで (金額査定あり)
	若手研究者	一般的助成 (35歳以下の研究者)	1～2年	60万円まで
	ジュニア研究者 (クラブ活動)	高等学校のクラブ活動	1年	30万円まで
		中学校のクラブ活動	1年	20万円まで
川づくり団体	流域川づくり団体	活動S	1年	150万円まで
		活動A	1年	100万円まで
		活動B	1年	60万円まで
		活動C	1年	30万円まで
	全国川づくり団体	活動A	1年	500万円まで (金額査定あり)
		活動B	1年	100万円まで (金額査定あり)
	新設川づくり団体	新設川づくり団体 自立支援助成	3～5年	毎年 50万円まで
学校	幼稚園、保育所、 認定こども園等	幼稚園、保育所、 認定こども園等	1年	10万円まで
	小学校、中学校、 高等学校、特別支援 学校等	河川教育とりくみ支援	1年	10万円まで
		単学年	1年	20万円まで
		複数学年 学年数2	1年	40万円まで
		複数学年 学年数3～4	1年	60万円まで
		複数学年 学年数5～6	1年	70万円まで

の助成区分について変更あり。

河川基金助成 募集要項の主な変更点 (2026 年度助成より変更)

【川づくり団体部門】

「流域川づくり団体」助成に「活動 S」を新設しました。「活動 S」は 2020 年度から 2024 年度に大臣賞を受賞した団体が対象です。助成金は上限 150 万円です。

助成対象者	助成区分	期間	助成金額
流域川づくり団体	活動S 2020年度から2024年度に 大臣賞を受賞した団体が対象	1年	150万円まで
	活動A	1年	100万円まで
	活動B	1年	60万円まで
	活動C	1年	30万円まで

【学校部門】

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等の助成区分「複数学年」の学年数「3 ～ 4、5 ～ 6」の助成金額を下記の通り変更しました。

旧		新	
助成区分	助成金額（上限）	助成区分	助成金額（上限）
複数学年 (学年数2～3)	40万円まで	複数学年 (学年数2)	40万円まで
複数学年 (学年数4～6)	50万円まで	複数学年 (学年数3～4)	60万円まで
		複数学年 (学年数5～6)	70万円まで

活動成果の発表会及び優秀成果表彰

河川基金助成による取り組みの成果を積極的に社会に発信し、広く普及、還元するため、部門ごとに活動成果の発表会を開催しています。また、優秀な成果をあげられた助成事業者を表彰するとともに、成果発表会の場で表彰式を併せて行っています。助成事業者や関係者の交流の場を設けることで、新たな研究や活動の萌芽や、さらなる発展のアイデアを得る機会となることを期待しています。

活動成果の発表会、優秀成果表彰

令和 7 年度 河川基金研究成果発表会

開催日：令和 7 年 8 月 22 日（金）

実施概要：助成を受けた全ての研究者による研究成果の口頭発表
及びポスターセッション等を実施

国土交通大臣賞：京都大学防災研究所 非常勤研究員 中村 亮太

環境大臣賞：福岡工業大学 教授 田井 明

優秀成果表彰：一般的助成 7 名、若手研究者 3 名、
ジュニア研究者 2 校に対して表彰



ポスターセッション

令和 6 年度 川と人をつなぐ活動成果発表会

開催日：令和 7 年 3 月 1 日（土）

実施概要：助成を受けた川づくり団体の取り組み活動の発表及びパ
ネルディスカッション、グループディスカッション等
を実施

国土交通大臣賞：藤前干潟クリーン大作戦実行委員会

優秀成果表彰：11 の川づくり団体に対して表彰



取り組み活動の発表

令和 6 年度 河川・水教育研究交流会

開催日：令和 7 年 2 月 15 日（土）

実施概要：文部科学省視学官による講演、河川・水教育研究会座長
による講演、助成を受けた学校の取り組み学習の口頭発
表及びパネルディスカッション等を実施

文部科学大臣賞：気仙沼市立面瀬小学校

国土交通大臣賞：三次市立塩町中学校

優秀成果表彰：幼稚園、保育所、認定こども園等 8 園、単学年 6 校、
複数学年 7 校に対して表彰



文部科学省 藤野視学官による講演



2026年度

河川財団賞及び河川財団奨励賞の募集を開始

河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果をもとに、大きく社会に貢献するなど特に卓越した功績が認められた助成研究者や今後の活躍が期待される優秀な若手助成研究者を表彰しています。



助成部門	助成対象者	副賞(研究奨励金)
河川財団賞	特に卓越した功績が認められた助成研究者	50万円
河川財団奨励賞	今後の活躍が期待される優秀な若手助成研究者	20万円

※「若手助成研究者」とは、助成年度の年度末（当該年の3月31日時点）において満35歳以下の助成研究者をいいます。

※ 河川財団賞に応募があったもののうち、卓越した功績が認められた助成研究者には、河川財団特別賞（副賞30万円）を授与することがあります。

※ 応募は自薦または他薦とします。

河川財団賞 表彰の分野

【学術貢献分野】

河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果をもとに、学会等に論文を発表し、学術的・社会的に評価された研究業績により、河川・流域の視点から防災・減災の取組み、水資源の利用の合理化、河川環境の保全等に関する学術の進歩・発展に顕著な貢献をなしたと認められる助成研究者を表彰します。

対象者：過去5年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者

【技術開発分野】

河川基金による助成事業で実施した調査・研究の成果を、河川等の現場での実践を通じて、防災・減災の取組み、水資源の利用の合理化、河川環境の保全等の推進に寄与する技術を開発・実用化し、大きく社会に貢献したと認められる助成研究者・研究機関を表彰します。

対象者：過去10年間に対象となる助成事業が終了した助成研究者または研究機関

募集期間

2025年(令和7年)

10月1日(水)～11月15日(土)


<https://www.kasen.or.jp/kikin/tabid305.html>

詳細は、河川財団 HPでご確認ください。

河川財団賞・河川財団奨励賞 検索

2026年度（令和8年度） 河川美化・緑化助成事業の 募集を開始します

地域の皆さまの河川環境を守る
活動を支援しています。

写真提供：ピクスタ 鴨川さんぽ／PIXTA（ピクスタ）

募集
期間

2025年（令和7年）

10月1日（水）～11月30日（日）

申請
方法

募集要項は河川財団 HPに掲載しています。
<https://www.kasen.or.jp/jyosei/tabid59.html>



河川美化・緑化事業 検索

申請様式をダウンロードし、必要事項を記入の上、下記の申請受付専用メールアドレスに送付してください。

ggg-shinsei@kasen.or.jp

助成の対象

河川及びその近傍における次のような活動が助成の対象となります。

- イ) 美化（河川清掃活動、花壇の整備等）
- ロ) 緑化（植樹・植栽、雑草、草刈りなどの活動）
- ハ) 環境の保全（樹木伐採や除草、草刈り、外来種〈植物〉駆除等）

助成コース

活動規模により4つのコースを設定しています。

- 「活動A」コース 20万円（定額）
- 「活動B」コース 10万円（定額）
- 「活動C」コース 5万円（定額）
- 「大規模植樹・植栽」コース 100万円（上限）

〈河川美化・緑化事業とは〉

公益財団法人河川財団と公益社団法人ゴルフ緑化促進会（略称 GGG）とが連携し、国民生活を取りまく環境の緑化推進の一環として行っている取り組みです。ゴルファーの皆さまからいただいた協力金（「緑化協

力金」といいます）を元に、河川等における美化、健全な緑化、環境改善・保全・防災等の活動に対し助成を推進し、河川環境の向上を図り、緑化協力金の理解促進に寄与しようとするものです。

INTERVIEW

川づくり
団体部門

仲間たちとみんなで楽しく水辺の清掃 自然体の活動に集まる社会の支持

——淡海を守る釣り人の会（滋賀県）



琵琶湖の湖畔で展開された「淡海を守る釣り人の会」の清掃活動

釣り人が「大好きな水辺や生き物を守りたい!」という思いから始めたゴミ拾いから、いつしか活動の輪は大きく広がり、地域の人に限らず多様な人たちと一緒に琵琶湖・淀川流域の水辺の清掃活動を行う「淡海を守る釣り人の会」(以下、「釣り人の会」と表記)。「釣り人の会」と河川基金のつながりは、新たに設立した団体を自立可能となるよう応援する助成区分である「新設川づくり団体」の申請から。新設川づくり団体で5年間活動したあと、「流域川づくり団体」へとステップアップしました。「川づくり団体」の中では、助成事業のあり方をはじめユニークなポリシーを持つ任意団体。今回はその「釣り人の会」の副代表の武田みゆきさんと、会を本拠地に独自の活動も展開している若きメンバー・木村隼人さんにお話をいただきました。

PROFILE



武田みゆきさん (写真右)

滋賀県・守山市環境政策課 環境コミュニケーター

1982年滋賀県草津市生まれ

淡海を守る釣り人の会 副代表

Jens-Net 代表理事

野洲川河川環境モニター (国土交通省委託)

2018年 セブンイレブン記念財団環境NPOリーダー海外研修派遣

「幼少期は学校以外の時間は畑と田んぼの周り全てが遊び場。弟・妹と旧草津川の土手を登り川遊び、琵琶湖の河口で泳いでいました。大人になり自分を育ててくれた自然の大切さに気づき、守りたいと思うようになり、一人でゴミ拾いを開始。やがて釣り人と企業と一緒に活動し日本最大級mp清掃活動になりました。本業では大人から子どもまで五感を使った環境学習を実施。日々、次世代の育成に邁進しています」

木村隼人さん (写真左)

総合学園ヒューマンアカデミー大阪心斎橋校フィッシングカレッジ 27期生

2005年生まれ

「幼い頃から父親と魚釣りをしており、そこからどっぷり魚釣りにハマリ、今では将来大好きな魚釣りで使用するルアー(疑似餌)を作る企業に就職するため、全国に唯一の『釣りの専門学校』に通学中。休日には琵琶湖で清掃活動を行っている『淡海を守る釣り人の会』で清掃活動等に参加しています」

大好きな水辺でゴミ拾い そこに釣り人が合流

いまから7、8年ほど前ですが、私（武田さん）は琵琶湖から流れ出る瀬田川（滋賀県、下流の大阪湾に向かうに従い、京都府では宇治川、大阪府では淀川と呼び名が変わる）の琵琶湖河川事務所（国土交通省の前にある住民連携施設「ウォーターステーション琵琶」に勤務していました。職場の目の前にある瀬田川が大好きでいつも散歩をしたりしていました。しかし、足元を見るとゴミが落ちてい

たので、自然にゴミ拾いを始めたのですが、残念ながらゴミを捨てていく人もいるわけで、特に釣りゴミが目立ち、釣り針なんかはとても危険です。見かねて勤務先の公式アカウントで「ゴミ捨てないで！」と発信していたら、それを見た釣り人から「僕ら、自分たちでゴミ拾いやっているのですが、一緒にゴミ拾いできませんか」とお声を掛けていただきました。それから施設を利用してくださっている地域の団体にも声を掛けて、一緒に清掃活動をしたのが始まりです。でも実は私自身は釣りをしないのです。釣りが趣味というわけではないのですが想いに共感し、しだいに仲間になりました。

なりました。

私は滋賀県草津市出身で、遊び場という旧草津川が琵琶湖の湖岸でした。小さな頃から身近にあった水辺。大人になってその大切さに気付くにつれて自分でゴミ拾いしていたところに、釣り人が合流して「好きな水辺をみんなで協力して守らなアカン」と、それまではそこまで意識はなかったのですが、その時、環境活動に目覚めた感じです。

自分が好きな川の清掃を 若いアイデアで自主的に

「釣り人の会」は「釣り人による清掃活動」を実施していますが、関連して若手メンバーが実施している「淀川清掃」「宇治川清掃」があります。「釣り人の会」の活動は、水辺のゴミを拾うというシンプルなスタイルの環境保全です。活動範囲が広いのですが参加者が多いので区間を分けて複数チームに分かれて、ゴミを回収し、本部に持ち寄って分別・カウントをします。

活動には各地から集まる釣り人のほか、地域の方、タイアップしている企業や行政の方が参加しています。すごく不思議なのですが「釣り人の会」のコアメンバーには滋賀県在住の人がほとんどおらず半分以上が他県から来ています。それだけ琵琶湖が愛されている証拠ですね。

「釣り人の会」のメインの活動場所は琵琶湖ですが、下流の宇治川・淀川の活動は、地元の川をきれいにしたいという学生が自主的に始めた活動です。直近では10月5日に開催した「宇治川清掃」を主催した木村隼人くんは釣りの専門学校の学生で、京都府長岡京市在住です。まだ19歳ですが、宇治川清掃は彼の主催で4回目。木村くんの提案で「釣り人の会」の若いメンバーと一緒に始めた清掃活動です。

「釣り人の会」の活動とは別という考えのもと、宇治川清掃には備品を貸し出したりする「協力」というかたちで関わっており、「釣り人の会」とは

別の活動なので、若い自由な発想で活動しています。自分がやりたい場所では個人が責任を持ってやりなさい方式。国交省に提出する書類の作成から全て若手メンバーが協力し合って作成しています。宇治川清掃では地域のパン屋さんが割引券をもらって、清掃の参加者が買いに行けるというような地域振興も兼ねた協賛を募り、より多くの水辺好きな方々が参加してくださるよう工夫を行っています。宇治川清掃と淀川清掃は「釣り人の会」が主催じゃないので、それも可能です。「釣り人の会」でやると結構力ちつとしてしまうのですが、それ以外は彼らの発想で自由にできますし、私も何も口出ししないです。

木村さん『2年ほど前から「釣り人の会」の活動に参加しています。自



清掃活動に続々と参加者が集まる



釣り人だけでなく家族連れや子どもも参加

分が初めて参加したのは淀川清掃です。ルアーメーカーが協賛で、ルアーがもらえるということで参加しました。もともと釣りが好きで、「同好の士」というか、釣りという共通の話題があつて楽しい活動だと思いました。たまたま「釣り人の会」の人と仲良くなって、次の清掃に誘われて、回数を重ねるうちにメンバーになりました。人とのつながり、新しく生まれる「輪」が本当に多いので、釣りだけではない自分の成長につながることも、魅力だなと感じます。

釣りは小学生の頃から本格的にやり始めていたのですが、琵琶湖よりも宇治川で釣りをするほうが多く、宇治川でもゴミ拾いやりたいなと伝えたら、会の人に「やってみなよ」と勧められました。

水辺の環境問題については、日頃から現地に足を運び直接触れることによって、魚たちをはじめさまざまな生物が暮らす水辺をより良く、より長く親しみをもってもらえるような環境を作っていきたいと思っており、どうせなら本腰入れてやってみようと、宇治川清掃を主催し始めました。

僕が主催する宇治川清掃活動はそんな思いから始まった清掃活動です。メインフィールドである宇治川でもよくゴミを目にするようになり、ほかの河川利用者もお互いに気持ちよく使える水辺が維持できるようにこれからも清掃活動を継続していきます。』

自信が持てて自立ができて 河川基金の助成を 「卒業」すること

「釣り人の会」は若いメンバーが多いのが特徴だとよく言われますが、特別な募集をしているわけではないです。若手が主催する活動で、参加してくれる高校生や中学生に声を掛け、釣りの話をしたりして友達になりその中で環境の大事さも教えてもらえる。その縁で、宇治川や淀川でゴミを拾いに参加した人が、琵琶湖の清掃活動に参加してくれれます。

「釣り人の会」の参加者募集はSNSとHPのみです。公式アカウントはX(旧ツイッター)とインスタグラム、フェイスブックあわせて5千人ぐらいフォロワーがあり、仲間たちとみんな楽しくゴミ拾いをして、それに参加者のみなさんが発信してくださいます。SNSを見た企業の方から「一緒に活動しませんか」「寄付します」などありがたいお声掛けをいただくこともあります。私たちは認定NPOでも国の認定団体でもなく完全ボランティアの任意団体なので寄付をしても控除も何もない。それでも企業からお声掛けいただいています。変化は自分たちで起こしているのではなく私たちのような活動が社会から必要とされている時代が来ているのかもしれない。

発足当初、5年間、河川基金の「新設川づくり団体」助成をいた

だいていましたが、「釣り人の会」はこの5年間で必ずどうにか自立しなければいけないと考えていました。3年目まではまだちょっと難しかったのですが、自己資金も4年目から稼げるようになりまし。設立したての時に5年間継続した助成をいただけたことはとてもありがたかったです。そのあと「流域川づくり団体」助成を2年間いただきましたが、ほとんど使わずにお返ししていました。助成金はずっともらい続けるものではないと思っているの、助成金をお返しできるようになった時、自信を持って「この会はもう大丈夫だ」と思えたのでそれを機に河川基金助成を「卒業」させていただくことにしました。



この日も「水辺好き」が大勢集う

楽しみながら続けられることを持ち寄ろう

「私たちの活動は『自分たちには何ができるか』を持ち寄って、できることから始めていくようにしています。みんなで楽しみながら試行錯誤して知恵を出し合い、それで持続可能な形で続けられることをしていく。

私たちはもともと水辺が好きで、好きだから水辺を守っているのだと思います」

そんな同じ思いの中学生から70代までの年代が集まっている「釣り人の会」。そしてメンバーの皆さんが清

掃活動を通して琵琶湖を楽しみ、清掃活動の効果も年々表れているそうです。



青木川で生き物調べ

今回取材に訪れた岡崎市立常磐東小学校は、愛知県の中央部、岡崎市の北東に位置する山間の小規模校です。通学する全児童が学校前を流れる青木川に架かる橋を渡って通学してきます。児童にとって川がとても身近な存在であることがわかります。

岡崎市立常磐東小学校は2022年から河川基金の助成区分「複数学年」を活用し、今年で4年目になります。今回お話を伺った伊奈良晃校長が、教頭として5年前に着任した頃、児童数はもう少し多かったそうですが、年々減少し、現在では全校児童数35名となりました。今後は小規模特認校制度を利用して他の学区からの児童の受け入れも進めていくそうです。小規模校ならではの取り組みや特性も含めてお話を伺いました。



PROFILE

岡崎市立常磐東小学校
校長

伊奈良晃さん

愛知県生まれ。

岡崎市立井田小学校教諭を皮切りに、7校での勤務を経て、現在に至る。前任の岡崎市立生平小学校で野生生物保護活動を通じた環境教育を、現任の常磐東小学校で河川・水教育を通じた環境教育に取り組む。



学びや遊びを通じ、 ふるさとの人や物を愛する子どもを育む ——岡崎市立常磐東小学校（愛知県）

河川・水教育を始めたきっかけ

私は前任校（岡崎市立生平小学校）でも「河川基金助成」を受け、総合的な学習の時間の中で川での体験活動に取り組んでいました。しかし、川へ行くまでに時間を要することから、一時間の授業の中で実際に活動できる時間は正味15分と、十分な活動時間を保障することができませんでした。立地的な条件により学習効率が思うように上がらないことに、もどかしさを感じていました。そんな時、常磐東小学校に赴任することとなりました。本校は正門前に青木川が流れており、河川・水教育を推進するのに最高の立地であると感じました。

当時、本校では学校の北側に地域の方が作られた「常東（ときとう）ランド」と名付けられた学びのスペースがあり、年に数回の活用をしてきました。しかし、常東ランドは職員室から直接見渡せる場所にないため、十分な

安全性が確保できないこと、行き来に時間がかかることから、それに代わるものはないかと検討を進めているところでした。

また、総合的な学習の時間におけるテーマ決定が担任に委ねられていたことにより、担任の思いや学級の実態に合わせて福祉、国際理解などさまざまなテーマにチャレンジしていました。学習の多様化という点では魅力的な取り組みでありましたが、毎年担任が変わる中で学習テーマも変わってしまうことから、継続的・系統的に学びを深めることが難しい状況にありました。

これらの要因から、目の前を川が流れているという本学区の恵まれた特性を活かし「河川基金助成」を活用して河川・水教育に、全校で取り組むこととしました。

本校が取り組んでいる河川・水教育

この地域は、川沿いに走る県道の両側に家があり、その後ろには山がそびえる地形であることから、宅

地以外の平地がほとんどありません。そのため、他地域に比べ、公園の数が少ない地域となっています。30数年前に、当時の校長先生や地域の方々が遊び場の少ない子どもたちのために遊び場所を作りたいという強い思いから、小学校前の河原は「せせらぎの広場」として整備され、川に降りて安全に水遊びを楽しめる場所となりました。

本校では「せせらぎの広場」を中心とした学習環境を最大限に活用し、1・2年生で生き物採集を中心に「親しむ活動」を進めています。同様に3・4年生は周辺環境や水質についての調査を中心とした「知る活動」を、5年生では3・4年生で調査したことをもとに「守る活動」に取り組んでいます。そして、6年生では自分たちの活動を周囲に発信し、地域ぐるみで青木川の将来を考え、発信することを目的とした「広げる活動」を展開しています。

令和5年度の5年生は、放流したアユが青木川に戻ってこないことを疑問に感じ、調査を進める過程で、青木川の下流に堰が築かれていることを知りました。「魚が戻って来られないような堰なんかなければいい」と考えた子どもは堰が作られている理由を追究し始めます。そして、この堰が防災上の理由から必要であるという現実に気付きます。一方で「サギが飛んできてアユを食べてしまうこともある」という事実をきっかけに、「アユを守るためにサギを駆除してもいいのか」という葛藤に頭を悩ます姿も見ることができました。

また、令和6年度の3年生は「青木川は楽しい場所だから、小さい子たちがもっとたくさん来られるようにしてあげたい」と考えました。そして、総合的な学習の時間の年間テーマを「みんなが楽しめる青木川にしよう」に決定しました。子どもたちは最初に川のことを調べ始め、実際に物差しを使ったり、自らの足を物差しの代わりに水



活動から川の状態の変化を読み取る力も養われていく

深を計ったりして、流れが速いところ、穏やかなところの違いを体感しました。活動を続けていくと、「雨が降った後だと深さや速さが違うよ。水の濁り方も違うから、そういう違いも教えてあげないといけないね」など、川の状態の変化を読み取る力も養われていきました。また、「小さな子はきつとお魚取りがしたい」と思っているから、生き物調べをしてポスターを作ろう」など、相手の立場に立って考えを巡らせながら、活動を進めました。その結果は、水深や流れの速さを記入した絵地図「青木川マップ」としてまとめられました。

さらに、立場を子どもから大人にかえ、「どんな川だったら自分の子どもを遊ばせたいか」保護者を対象としたアンケート調査を実施しました。その結

モクズガニを捕まえました



果から、大人は思った以上に川の活動について安全面を気にしていることを理解しました。楽しいだけの川ではないけないと、安全面についての重要性に改めて気付くきっかけになりました。

地域住民・関係団体との連携で深める学び

明治から昭和期にかけて、常磐東学区の主要産業となった紡績（ガラ紡）産業。青木川は、電力供給のための水車を回す動力源としての役割を果たしました。また、同時期に地域住民の生活を支える水としての一面も担っていました。一方で、昭和の初期には青木川が氾濫し、地域に大きな打撃を与えたこともあったようです。青木川と地域の関わりの歴史を学ぶことは、青木川とともに生きる上で必要なことであると考えています。そこで、地域にお住まいの方々と特別講師としてお招きし、貴重なお話を聞かせていただきました。同様に関係団体との連携も大切にしています。学区社会教育委員会、学区総代会、福祉委員会の皆さんには「せせらぎの広場」の環境整備にご尽力いただいています。また、昨年度は上流から流れてきた土砂が堆積した河原の再整備をしていただきました。さらに、漁協の皆さんのご協力により、毎年4月にはアユの放流体験を行っています。子どもたちの健やかな成長を支えたいという思いから、献身的なご協力をしてくださる地域・関係団体の皆さんには、いくら感謝しても足りません。今後は、さらに連携して学びを深め

ようと考えています。その一環が、今年予定をしている「青木川サミット」です。子どもからの提案をきっかけとして、子ども、保護者、地域住民、関係団体の方々がこの川をどうしたいのかを話し合い、意見を交換する場になればと考えています。それぞれの立場から、川との付き合い方を見直すきっかけになることを期待しています。

継続した学びの中で見えてきた成果

令和5年度5年生の実践からは、最初はアユを放流するという楽しい体験だけで完結した活動が、何年も経ていくうちに、「毎年アユを放流しているはずなのに、なぜアユを食べることができないのか」という疑問を抱くようになりました。そこから下流には人口の堰があり、水の逆流を防ぐことで、人々の安全が守られる一方で、魚が戻ってこれられなくなっているという大きな学びにつながることができたのだと思いました。本校は公共交通機関が利用しにくい立地にあることから、自分たちが調査した内容や考えを発表する対象が、どうしても校内に限られます。その中でも最大限の成果を期待して、全校を対象にした発表会を行うようにしまし



活動の合間に、数日前の大雨で流れてきたゴミを拾う

た。低学年の子どもたちにとって難しい内容なはずですが、上学年の堂々とした発表ぶりを見て、自分たちもこういう学習をするのだと、学年が上がることを楽しみにするようになりました。高学年の子どもたちが良い見本となり、活動意欲を高めるきっかけになっていると考えます。上級生たちが手間暇をかけて調べたり学んだりしたことが、低学年の子どもたちには既に基礎として備わっている部分があるので、自然と学びが深まります。「継続は力なり」を感じる部分です。

楽しい体験的活動だからこそ大切にすること

学校の目の前が川ということで、川を題材とした体験学習はいつでもすることができそうですが、学校として安全面

にはさまざまなことに気を付けています。活動前には草刈りを行い、必要に応じて足場を用意し、子どもたちが渡りやすいように支援するなどのさまざまな工夫を行っています。また、当日は安全管理を徹底するために担任外の先生方が活動に付き添うなど、子どもたちから目を離すことがないように配慮しています。川は危険な場所であるけれども、それ以上に楽しい場所であり、多くの学びが見込める場所であるという考えのもと、安全で楽しい実践を続けていきたいと思っています。

取材を終えて

今回、取材に伺ったのは9月でしたが、まだまだ残暑は厳しく、太陽が照り付ける中、川で活き活きと活動している子どもたちの様子を見学させていただきました。河原での子どもたちは、五感を研ぎ澄まし、自然の心地よさを感じながら、水の量の変化や生物の成長などを確認していました。ガサガサ網で捕まえた生き物観察を行う児童や、数日前の大雨で流れてきたゴミを拾うことに夢中になる子どももいました。小規模校の特性でしょうか、児童一人一人の興味関心に寄り添って先生が子どもと向き合う、温かな時間が流れていました。

INTERVIEW

研究者・
研究機関部門

河床材料の粒度構成変化が河道内樹林化・ 流路変動特性に与える影響の実験的検討

富山県立大学准教授 久加朋子さん（富山県）



2016年豪雨災害後の北海道・十勝川管内の美生川（びせいがわ）。
低水路付近の樹木の大半が流失している

河道内の樹木は、河川の流況や流路変動の影響を受けて分布を変化させる一方で、河道地形の形成にも影響を与えるなど、相互作用的な関係にあります。近年、全国各地で河道内の樹林化が河川管理上の課題となる中、富山県立大学准教授 久加朋子さんは、河床材料の影響を加味したうえで樹木（植生）と河川の流路変動との関係を明らかにしようとする先駆的な試みに挑戦されています。企業の就職を間にはさむ異色の研究者経歴を持つ久加さんに、研究に対する姿勢と研究者として大切にしている思いをお話いただきました。



PROFILE

富山県立大学
工学部 環境・社会基盤工学科
准教授
久加朋子さん

2004年 大阪女子大学理学部環境理学科卒業
2006年 大阪府立大学大学院理学系研究科
物質科学専攻 修士課程修了
2006年 新日本環境調査株式会社環境技術部
2014年 京都大学大学院工学研究科
社会基盤工学専攻 博士課程修了
博士（工学）
2014年 北海道大学大学院工学研究院
環境フィールド工学部門 博士研究員
2018年 同 特任准教授
2021年より現職

専門は河川工学（土砂水理学）。河川における土砂移動を伴う河床・流路変動を主な研究対象とし、現地調査、データ分析、水路実験、数値解析を研究手法に、近年は、河道内樹木と流路変動との相互作用、混合粒径場における流路変動特性、生物生息場等の流域環境に関する検討に取り組む。

研究の「おもしろさ」で 続けていたら道ができた

大学は理学系で、川にいる水生昆虫を調べる研究室に在籍し、修士課程修了後に民間のコンサル系の環境調査会社に就職しました。仕事の2割ほどが研究でありがたかったのですが、例えば出水前と出水後の河川の環境調査をしても、出水中のことは何もわかりません。でも本当はそこで何か起きているはず。これを知りたいと思って、土砂の水利の式がないとわからない。結局、土木のことがわからないと川のこととはわからない。出水中の川の計算ができるようになりたいと思ったので、数値解析ができると格好よさそうだし(笑)。理学部出身なので時間はかかるかもしれないと覚悟した上で京大の河川工学の土砂水理学の研究室に博士課程後期で入り直しました。社会人ドクターという方法もあったのかもしれないが、しっかりとやらないと不満足な結果に終わると思い、環境の研究はもう一切やりませんでした。

博士号を取って、最初はコンサルに戻るか他の就職先を探そうかとも思っていたのですが、すぐ北大行きが決まり、ポスドクの研究員として4年間を過ごしました。その後、地域防災分野の寄付講座が開設されて、特任准教授として3年間、局所豪雨による河川災害といったテーマで研究をさせていただきました。任期終了と同時に富山県立大学に異動しました。研究者を常志してきたというよりは、研究の「お

もしろさ」に魅かれ、楽しかったので続けていたら道ができたという感じです。

京大ではどちらかというと水路実験がメインで、実河川はあまり対象としていませんでしたが、北大で、2016年の豪雨災害(平成28年8月北海道大雨激甚災害。観測史上初めて3つの台風が北海道を直撃)の時、土木学会水工学委員会の北海道豪雨災害調査団の末席に加えていただきました。その時ほぼ初めて、土砂水利として現地を見て調査をしたという感じです。あの豪雨では道内のいくつもの河川が破堤しましたが、堤防の内部を初めて見たのもその時です。驚きました。現場では連続破堤していたり、橋が落ちていたり、越水していないのに壊れた堤防もたくさん見ました。破堤している延長もすごく長く、スケールが大きすぎて、崩れたはずの堤防がどこにあるのか、自分がどこに立っているのかもわからないほどでした。侵食、洗掘など話には聞いていたけれど、実際に見たのはその時が初めてです。それまで実験と理論、土砂水利の基礎ばかりを勉強していた感じですが、あの調査がきっかけで現地に出るようになりました。

データ分析、数値解析、 模型実験、現地調査を 積み重ねる

データ分析、数値解析、水路模型実験、現地調査の積み重ねが私の研究方法です。

模型実験では局所的に掘られた砂がどこへ行くのか、それがどう移動して

川の地形が形成されるのかなど、現象をしっかりと目で見ることでできるところがおもしろいです。でも、1ケースに大きな費用、労力や時間がかかるので、たくさんの実験はできません。焦点を決めて行う必要があります。

数値解析はあくまでシミュレーションなので条件さえ入れれば何らかの答えは出てきます。ただその答えを解釈するのは計算した人自身、研究者自身です。計算結果が妥当かどうかの判断は自分自身がしないといけません。現場感覚や実験仮説がないとそれは難しい。結果のどこに注目するかも自分で決めないといけません。最初からある程度の着目点がないと、計算だけで現象を読み解くことは難しいです。新しい現象を見たいと思っても、そのモデルが数値シミュレーションに組み込まれていなければ、当たり前ですが結果には出てきません。数値解析に新しいモデルを組み込んだら、チェックの意味でも実験や現地でも検証する。そしてもう一度計算に戻る。そうしたことをお互いに補完する感じで行うことが大切です。

北海道大雨



激甚災害の時は音更川(おとふけがわ)流域で7箇所が連続破堤しましたが、それが数値シミュレーションではなかなか破堤を再現できませんでした。樹木のないケースでは破堤しませんでした。樹木を設定しても破堤しませんでした。ふと「河岸が侵食されているのに樹木が抜けないのは変だな」と感じ、河道の樹木が抜け出すプログラムを新たに組み入れてみました。するとシミュレーション上でいきなり破堤しだったので、木が抜けるケースを試みたところ、いきなり破堤、しかも6箇所連続で破堤したのでびっくりしました。寒地土木研究所の川村研究員と共同実験等の研究を行っていたので、「すごくおかしい解析結果が出た」と相談しました。すると、模型実験でもまったく同じ結果でした。高水敷に樹木が連続的に繁茂しており、かつ出水途中に局所

2016年北海道豪雨災害で被災した十勝川管内・音更川。
左右岸で連続7箇所が破堤した(写真:2016年北海道豪雨災害調査団)

混合粒径（左）と一様粒径（右）における植生定着状況の比較実験



的に抜け出す場合、河道内に植生がない時よりも川の局所的な蛇行度が大きくなるのです。計算では、ある場所でも局所的な河岸侵食が始まり、その過程で低水路に土砂が供給されます。するとその下流側では砂州が発達し、さらに新たな植生流失を伴う河岸侵食が始まりました。こうした過程を繰り返し、最終的に6箇所連続で破堤してしまう結果になったのです。計算結果だけならばおそらく信じられませんでした。が、実験で確認し、現地の状況もそれを説明しているの、これは間違いないと思います。

植生と流路変動の関係を粒径分布の違いから検討

樹木・植生と河川の流路変動の関係を調べるために、当時、河川基金の助成もいただいて、網状流路に植生を生やして通水する水路実験をやっていました。そのため、現地河川についても道内の樹木があまり生えていない川、これから生えてきそうな川を探していました。当然もうあちこちの川が樹林化していて苦労したのですが、その豪雨災害で帯広のほとんどの川で樹木が流出してなくなってしまう、皮肉なことに調査に適した候補地がたくさん出現しました。河川基金の助成でほうぼう見に行つて、最終的には美生川に決めたのですが、そこでは今も調査を続けさせてもらっています。

樹木と流路変動に関する研究は富山に来てからも継続していますが、北海道と本州、富山とでは樹木の入り方や地形への影響が違ふと感じています。北海道のような融雪出水がないので樹種が違うことがいけば大きな要因でしようが、もう一点、流路内の河床材料が違うことも関係があるのではないかと思います。

北海道と本州、富山の河川では、急流区間の勾配は結構似ていると感じる一方、河床材料が全然違って、北海道だと似たような平均粒径が10キロ以上続くのですが、富山だと4キロ5キロという短距離で代表粒径がどんどん変わっていきます。しかもとても大きいものがある。粒径分布の幅がすこ

く広いという特徴があります。

これまでの多くの研究から、河道内の植生が流路本数を減らして網状河川を蛇行河川へ移行させたり、砂州の固定化を促し、河岸侵食を抑制するなどの効果が示されていますが、これらの研究の多くは一樣粒径場を対象としていて、混合粒径場における流路変動と植生との相互作用については多くは明らかにされていないと感じます。混合粒径については文献が限られていて、自分でやらないと欲しいデータ、よいデータは採れませんので、まずは実験で見てみようというところからはじめています。

河道内への樹木の侵入は各地で問題になっていきますので、川にどれぐらい樹木が入ってくると急流河川の流路形態が変化するか、破堤のリスクが上昇するのかわからなにかと思っています。一樣粒径での実験段階はだいぶ終わっているの、数値解析をして、密度の問題なのか、樹木の分布の問題なのか詳細な検討をして、一定の「この川の危険ライン」のようなものを出せたらいいなと思っています。

既往最大出水を超えるような大出水が起きると、河川はその数年後にかなり樹林化するというのを航空写真や衛星画像から確認しています。「攪乱がないと樹林化する」ということも言われていますが、逆に大攪乱が起るとその数年後に一気に樹林化するリスクがあるともいえます。「攪乱が河原の維持に大切」とも言われますが、実は大出水の場合は、樹木が比高の高い砂州

通説と違う結果が出た瞬間の「おもしろさ」

自分が興味あることを、何か社会で困っていることを解決するのに役立つようなところから研究をはじめたいと思っています。国の研究所などが一気に力を入れて進める重点的な研究テーマもありますが、できるだけ研究のシードとなるような新しい現象や新しい解決法の発見にトライしたいなと思います。自分にとって「おもしろい」かど

うかが大事ですね。研究して、皆が「こうだ」と思い込んでいる既存のものとは違うこと、通説とは違う結果が出た瞬間に「おおっ」と驚けることが私にとっての「おもしろい」ことだと思っています。

や高水敷に定着すること、数年後には樹木化がひどくなる現象があります。それをしっかりとデータで示したいと思っています。

ご寄付 ありがとうございます

令和6年10月から令和7年8月までに「宮崎大淀川スポーツセンター様」をはじめとする団体や個人の皆さまより1,686,139円のご寄付をいただきました。寄付者の皆さまに心より御礼申し上げます。ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、

川づくり団体の活動や学校での河川・水教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人 河川財団
理事長 小俣 篤



河川財団奨励賞の表彰を行いました

令和7年8月22日に開催された河川基金助成 研究者・研究機関部門の成果発表会である「河川基金研究成果発表会」内で、令和7年度河川財団奨励賞に選定されたお二人に河川財団奨励賞を授与いたしました。誠にありがとうございます。

■河川財団奨励賞受賞者

氏名	所属機関等	対象事業	河川基金助成採択年度
葉田野 希	新潟大学 理学部 准教授	異なる気候・地質条件下の河川による土砂生産・輸送プロセスの比較	令和2年度
東川 航	国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 研究員	氾濫原に生息するミヤマアカネ（トンボ目）を指標とした生態系ネットワークの再生・向上に向けた生息地配置モデルの開発 － RADSq 法を応用して－	令和3年度



表彰を受ける葉田野希さま



表彰を受ける東川航さま

河川基金助成の活用例



河川基金

河川基金助成の活用例は、河川基金 HP の「河川基金助成の現場から」をご覧ください。右のQRコードより3部門の研究、活動、河川・水教育の詳細をご覧ください。

詳しくは…[河川基金 HP『河川基金助成の現場から』ページへ！](#)

www.kasen.or.jp/kikin/

(QRコードはコチラ▶▶▶)





Our Life, with River

河川財団は、河川に関する調査・研究及び環境整備並びに河川への理解を深めるための活動に対する助成並びにその実施を行うことにより、国土の利用、整備又は保全及び国民の心身の健全な発達を促進し、公共の福祉を増進します。

河川基金へのご寄付について

我が国では、国土保全と国民生活の安定を図るため治水施設の整備と水資源の開発が進められ、我が国の発展を支えてきました。しかしながら、依然として水害は各地で発生し水不足の懸念は継続しているため、治水対策などの推進は重要です。「河川基金」は、昭和63年

3月に設立され、国や地方公共団体による河川整備と相まって、その効果を高めるための多様な調査研究や活動に支援してまいりました。このような河川基金の趣旨をご理解いただき、本基金のさらなる造成のために皆様のご協力をお願いいたします。

河川基金 寄付のお手続きはクレジットカード決済も可能です。

ご利用いただけるクレジットカードブランド



寄付金の税法上の優遇措置について

当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人」としての認定を受けておりますので、当財団への寄付金には河川基金への寄付金及び一般寄付金のいずれについて

も特定公益増進法人としての税制上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除などが受けられます。



公益財団法人
河川財団



●お問合せ

お問合せは下記HPの「お問合せフォーム」よりお問合せください。
<https://www.kasen.or.jp/tabid83.html>

本部

〒103-0001

東京都中央区日本橋小伝馬町11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F)

<https://www.kasen.or.jp>

総務部 TEL: 03-5847-8301

経営企画部 TEL: 03-5847-8302

基金事業部 TEL: 03-5847-8303

河川・水教育センター TEL: 03-5847-8307

河川総合研究所 TEL: 03-5847-8304

(河川管理技術政策研究センター)

東京事務所 TEL: 03-5847-8306

名古屋事務所

〒460-0002

愛知県名古屋市中区丸の内3-5-10 名古屋丸の内ビル7F

TEL: 052-963-5533

近畿事務所

〒540-6591

大阪府大阪市中央区大手前1-7-31 (OMM 13F)

TEL: 06-6942-2310